



市民活動の 新たな挑戦

いろいろな悩みや不安、難題を抱える人たちを支え、問題解決に積極的に取り組む市民活動は各地です。野を広く広げている。フアイザーではヘルスケアの分野の市民活動を支援し、その社会的認知を高めることを目的に、2000年から助成プログラムをスタートさせた。過去の実績にとらわれずに、活動のユニークさと将来性に評価の重点を置いているのが特徴。2002年度の助成対象となった各プロジェクト(左頁参照)を中心に、9回連続(今回は第4回)でリポートする。



写真上/見たり触ったりできる布製の巨大な性器模型やイラストなど、いろいろな教材を使った講義。浮き袋でつくった産道をくぐり、生まれた時のことを体験する当事者。写真右/EPO代表の野嶋スマ子さん



特定非営利活動法人 エンパワメント・プランニング協会 知的障害者の性のワークショップ事業 (大阪府)

知的障害者と 支援者が共に学ぶ 「性のワークショップ」

「知的障害者というのは、他の障害者以上に支援者を含めたまわりの人たちが地域環境によって、生活や生き方が大きく左右されてしまっています。性の問題でも同じです」

とエンパワメント・プランニング協会(以下EPO)代表の野嶋スマ子さんは言う。

EPOは、障害の当事者や支援者、通所授産施設の現場責任者などとともに、障害者に関してライフワーク的に取り組んでいる大学教授などの研究者が集まる個人会員組織。当事者や、当事者との関係、役割のなかで起こる支援者の迷いや悩みを共に考えながら、当事者や支援者のエンパワメント(力づけ)を目指す。現場サイドで起こっているさまざまな問題を提起し、地域の施設や支援者らに呼びかけ、 「支援との関係性」をテーマとするセミナーや講演企

画などの活動を展開している。「知的障害者の性については多くの問題をかかえながら、なおざりにされてきたテーマです。親や施設職員はいつまでも子ども扱いにしたり、性衝動のみを心配して適切な指導や助言ができない。その結果、当事者は思春期を迎えても抑圧される。同意なしで中絶手術を受けさせられたり、結婚を禁止されたりもする。性のワークショップは、そんな偏見を取り除き、当事者自身の考えや行動を支援者にゆだねるのではなく、自らが決定し表現できるようにすること。また、その支援のあり方を学ぶことを目的に企画しました」

今回は、月1回ペースで行われる8回連続講座。夏と最終回は1泊2日の合宿もある。当事者8人、施設の職員などの支援者10人が参加。そ



当事者と支援者を一緒にした「性交」についての講義。真剣そのものの当事者に対して、とことなく遠慮がちな支援者たち

れぞれ20、30代が中心だ。最初は歌やゲームで性にどのくらいに関心や知識を持っているかを調べる。2回目以降はからだの名称や仕組み、男女の違いやセックス、恋人や結婚など段階的に楽しみながら学んでいく。

ワークショップの講師として依頼されたハートブレイク代表の黒瀬久美子さんは、「養護学校などで8年前からこのような講習会を行ってきた。今回も緊張しているのは職員の方です。寝た子を起すなどという感覚で、この先何かあったらどうしよう、親から苦情が来たらどう対処したらいいかわからない、といった不安を持っています。日常、現場で困っている問題なので、たくさん集まってほしい」と、ますますこうしたワークショップの必要性を感じている。

**2002年度
助成対象プロジェクトの
団体名・活動内容・
主な活動地域**

1	重度知的障害者の 「ライザー」サービスの創設 特定非営利活動法人 障害者家族地域生活支援事業所 フリーダム十勝(北海道)
2	精神障害回復者 小規模共同作業所マップ 特定非営利活動法人 札幌作連(北海道)
3	商店街で活動する精神障害者の ピアサポート支援事業 特定非営利活動法人 SAN Net青森(青森県)
4	青年とまちの人とがふれあう場 「とらいスペース」の開設 特定非営利活動法人茨城NPO センター・コムズ(茨城県)
5	ひきこもり当事者による 雑誌発行プロジェクト 特定非営利活動法人 東京シュレ(東京都)
6	女性アルコール依存症者 サポートセンター事業 特定非営利活動法人 ジャパンマック(東京都)
7	ミャンマー/ドローボン郡区 障害者支援事業 特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン(東京都)
8	プライマリヘルスケア・アプローチ による路上死のない街へ 新宿連絡会医療班(東京都)
9	摂食障害者の自立と成長のための ピアサポート事業 日本アパルキシア・プリミア協会 (東京都)
10	病気の子ども支援のための 情報発信とネットワーク構築事業 病気と子どもネット・京都(京都府)
11	知的障害者の性の ワークショップ事業 特定非営利活動法人エンパワメント ・プランニング協会(大阪府)
12	小児がん患者、家族の 精神的サポート体制の確立事業 特定非営利活動法人 エスビューロー(兵庫県)
13	精神障害者ピアヘルパー等 養成事業 兵庫県高齢者生活協同組合 (兵庫県)
14	在日外国人高齢者の地域における 居場所づくり事業 神戸定住外国人支援センター (兵庫県)
15	芸術とヘルスケアの関わりによる まちづくり事業 アートステーションどんごや(宮崎県)

*他に、12団体が続成対象としてプロジェクトを行っています。

**【ライザープログラム】
心とからだのヘルスケアに
関する市民活動支援**

2003年度 募集要項

1. 募集期間: 2003年6月16日～7月18日
2. 助成金: 1件あたり300万円を上限とし、本年度は15件程度の助成を予定しています
3. 助成の期間: 2004年1月1日～12月31日(1年間)とします
4. 対象となる分野: 特に次のようなプロジェクトを重視します。
 - 1) 成長過程にある人たちの心身のすこやかな発達を支援する活動
→ おもに10代が抱える問題を克服し生きる喜びをもつことを助けるもの
 - 2) 社会的な受け皿がないために保健・医療が受けられない人たちの心身のケアを支援する活動
→ 外国人、路上生活者、PTSD(心的外傷後ストレス障害)などの人々を対象とするもの
 - 3) 障害をもつ人や療養にある人たちの充実した生き方を支援する活動
→ 身体障害、知的障害、精神障害などの人々、難病、長期療養にある人たちの社会生活を豊かにするもの
5. 問い合わせ先:
ライザープログラム事務局
プログラムの詳細は、こちら
<http://www.pfizer.co.jp/pfizer/company/philanthropy>



写真上/難病の子どもを抱える家族からの電話相談と、患者家族の声や医師たちからの病気や治療の解説などが掲載されている機関誌「クライス」。励まし合ったり、治療に関する情報交換の場になっている。写真下/手前右から時計回りに、安井さん、安道さん、原医師、草深医師

**特定非営利活動法人 エスビューロー
小児がん患者、家族の
精神的サポート体制の確立事業
(兵庫県)**



原純一医師
附属病院の
当医であった
大阪大学
子どもの担
子どもの担
当医であつ
た大阪大学
附属病院の
原純一医師
に出会った。

**当事者だからこそ
難病患児と
母親を支えられる**

「私は基本的に今でも全身で泣いているんです」と代表の安道照子さんは声を震わせる。安道さんの長男が小児がんで5歳5カ月の短い命を終えたのは2000年の1月だった。「どうしてうちの子が：私は何か悪いことをしたのだから」と自分をひどく責めた。心が真っ白になった。自分が生きていく意味すらないと思つた。

わが子の49日が過ぎた頃、そんな安道さんを小児がん学会へ誘つたのは子どもが同じ病室にいた安井美喜さんだった。安井さんも数カ月前に小児がんで1歳9カ月の長男を失つていた。その学会で偶然、

「私に基本的なことは山ほどあった。泣いているんです」と代表の安道照子さんは声を震わせる。安道さんの長男が小児がんで5歳5カ月の短い命を終えたのは2000年の1月だった。「どうしてうちの子が：私は何か悪いことをしたのだから」と自分をひどく責めた。心が真っ白になった。自分が生きていく意味すらないと思つた。

わが子の49日が過ぎた頃、そんな安道さんを小児がん学会へ誘つたのは子どもが同じ病室にいた安井美喜さんだった。安井さんも数カ月前に小児がんで1歳9カ月の長男を失つていた。その学会で偶然、子どもの担当医であった大阪大学附属病院の原純一医師に出会った。

「私は基本的に今でも全身で泣いているんです」と代表の安道照子さんは声を震わせる。安道さんの長男が小児がんで5歳5カ月の短い命を終えたのは2000年の1月だった。「どうしてうちの子が：私は何か悪いことをしたのだから」と自分をひどく責めた。心が真っ白になった。自分が生きていく意味すらないと思つた。

わが子の49日が過ぎた頃、そんな安道さんを小児がん学会へ誘つたのは子どもが同じ病室にいた安井美喜さんだった。安井さんも数カ月前に小児がんで1歳9カ月の長男を失つていた。その学会で偶然、子どもの担当医であった大阪大学附属病院の原純一医師に出会った。

「私は基本的に今でも全身で泣いているんです」と代表の安道照子さんは声を震わせる。安道さんの長男が小児がんで5歳5カ月の短い命を終えたのは2000年の1月だった。「どうしてうちの子が：私は何か悪いことをしたのだから」と自分をひどく責めた。心が真っ白になった。自分が生きていく意味すらないと思つた。

わが子の49日が過ぎた頃、そんな安道さんを小児がん学会へ誘つたのは子どもが同じ病室にいた安井美喜さんだった。安井さんも数カ月前に小児がんで1歳9カ月の長男を失つていた。その学会で偶然、子どもの担当医であった大阪大学附属病院の原純一医師に出会った。